



《約500年の歴史がある光福寺で、子どもたちにさまざまな体験の機会を提供する「日曜学校」を開いている》

日曜学校は、寺子屋の流れをくむと考えられる歴史ある取り組みです。昔は娯楽が少なかったこともあり、約100年前の写真には100人くらいの子どもが写っていました。10年前に住職を継いだ時は20〜30人まで減っていました。

学校は毎月1回、午前9時に始まり、お経を上げ、法話の後にイベントを行います。多くの子どもに参加してもらえるよう、私はまず小学1〜6年生としていた年齢制限をなくし、2、3歳から入校できるようにしました。イベントでは、市民劇団の公演や落雁専門店による落雁づくり体

直方市の光福寺住職

大友 顕立さん



験など、外部から講師を招き、より魅力的な内容になるよう工夫。新型コロナウイルスの影響で開催を見送っており、どのタイミングで再開するか検討中です。

《中斷前まで参加者は増えていた》

福岡市や北九州市のお子さんを含め、60〜70人が参加していました。子どもたちが楽しんでいました。

しそうにしているだけでなく、「感謝の気持ちを持つ」「うそをつかない」など心の教育に力を入れており、ご家族に評価されているのかもしれない。

福岡市や北九州市のお子さんを含め、60〜70人が参加していました。子どもたちが楽しんでいました。

《つばき油を搾って販売し、活動を充てている》

(寺がある) 下境地区はツバキの木が多く、昔は各家庭で油を搾っていたそうです。ご年配の方々がつばき油を欲しているということで、お寺で作りました。地域の人たちに実を持ち寄ってもらい、門徒の皆さんと油を搾ってお渡しし、残ったつばき油を販売。日曜学校は地域の皆さんに支えられています。

《ほかにも多くの行事に取り組んでいる》

「仏教講話」「コーラス」「寺ヨガ」を始めました。いろんな行事に取り組むのは、お寺を身近に感じてほしいと願うからです。お寺は仏事を行う場所でもあります。それ以外にも社会的な活動をやる場だと考えています。

ご門徒さんが都市部に移り住み、少しずつその数が減ってきたのと同じように、地域コミュニティが崩れつつあると感じています。

新型コロナの影響で地域行事の多くが中止となりましたが、これまでじわじわと広がっていた、人との交流や接触を避ける流れが今後一気に進むのではと懸念しています。お寺での社会活動を通し、地域の結びつ

きを再び強くできたら、と考えています。

《お寺に足を運んだ人にとんなどを感じてほしい》
ストレスがたまる社会ですから、少しでも緊張の糸を緩めてもらえればうれしいです。そしてご先祖さまのことを思い、その延長で仏教の教えに触れていただければ、と思います。

《生きにくい時代。どんな心持ちでいるべきか》
人はあるものに執着し、「こうあるべきだ」などと偏った考えを持ってしまいます。難しいですが、凝り固まらず、ハンドルの「遊び」と同じように心にゆとりを持つことが大切だと思います。張り詰めた状態で生きていくことを避けてほしい。偏らないよう、ものの見方を少し変えるだけで、見えてくる世界が違ってくるはずです。

(田中良治)

おおとも・けんりゅう 1979年生まれの40歳。慶応大商学部でマーケティングを学ぶ。卒業後、京都市の中央仏教学院を経て、実家でもある光福寺の副住職に。2010年に第17代住職に就く。日曜学校は入校料千円、年会費2千円。「寺ヨガ」などは7月から再開した。

地域のつながり再び強く